

SPICA国際科学会議2013

“From Planets to Distant Galaxies: SPICA's New Window on the Cool Universe”

開催期間：2013年6月18日～6月22日

開催地：東京大学 本郷キャンパス 伊藤国際学術センター

独立行政法人 宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所
松原 英雄

本国際会議は、2022年度の打ち上げをめざして宇宙航空研究開発機構が進めている次世代赤外線天文衛星 SPICAのこれまでの検討・開発成果に基づき、2020年代の天文学・宇宙物理学においてSPICAが担うべき科学目的、および期待される成果を、国際コミュニティで議論するために開催したものである。SPICAは日本の赤外天文衛星「あかり」、ヨーロッパのハーシェル宇宙天文台、アメリカのスピッツァー宇宙望遠鏡、WISE衛星等これまでのスペース赤外線天文衛星を支えて来たコミュニティが全て結集して推進している、スペース赤外線天文学分野で世界唯一の将来ミッションである。

会議は6月18～21日の4日間にわたり、東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールで開催された。SPICAが挑む3大科学テーマ「銀河の誕生のドラマ」、「惑星系のレシピ」、「宇宙における物質循環」のそれぞれについてSPICAの科学的価値・ユニークさを示し、さらに惑星・星・銀河の形成と進化過程の解明にSPICAを如何に有効に使うか、について議論を行った。出席者は182名（うち海外から80名）。51件もの口頭講演には、3大テーマの基調講演も含む招待講演20件および一般口頭講演31件が含まれ、さらにポスター発表84件が、会場横のホールを埋め尽くした。

最近の科学的成果をリードしているのは、やはり今年4月に液体ヘリウムが枯渇し運用を終了したばかりのハーシェル宇宙天文台であった。これまでにない高い感度・解像度を活かし様々な新しい成果をハーシェルはもたらしたが、「これは氷山の一角にすぎない」という評価が多く研究者から表明された。また「あかり」の成果を引用しつつSPICAの観測への期待を述べる発表も数多くあった。

この国際会議で、SPICAの観測がカバーするコア波長域（5～210 μm ）が、如何に様々な物質の物理化学状態の診断に有効なスペクトル線／バンド構造に富んでおり、極低温に冷却された口径3mの望遠鏡の圧倒的な検出感度が如何にかけがえのないものであるか、が満場一致で確認された。

貴会のご支援を賜り、SPICA計画の科学的価値の再確認とその実現につながる有意義な会議を開催する機会を得たことに心から感謝している



会場の会議風景



参加者の集合写真